

アジア歴史資料センターの広報活動について －中高生や大学生を対象として－

アジア歴史資料センター 牟田 昌平

1. はじめに

アジア歴史資料センター（以下「アジ歴」という。）の設立を決定した1999年11月30日の閣議決定『アジア歴史資料整備事業の推進について』では、「国が保管する資料について国民一般及び関係諸国民の利用を容易」にすることが謳われている。アジ歴設立準備室が想定した利用者の中でも最も重要視したのが次世代を担う中高生や大学生であった。そこでアジ歴では、設立当初から積極的にアジ歴の利用を広めるために、大学や高校教師を対象としたワークショップやセミナーを開催してきた。2002年11月の開設以来、国内の大学や高校教師の歴史研究会等で開催したワークショップやセミナーは30回を超える。本稿ではこれまで6年近いアジ歴の中高生や大学生を対象とした広報活動の経験を踏まえ、一次資料を利用した歴史教育の可能性や課題を紹介する。

2. 広報活動の概要

2003年には筑波大学、慶応義塾大学、鳥取大学を訪問し、アジ歴についての広報活動を行った。2004年1月には新潟大学において社会科教員を目指す大学生を対象に、また、2月には北海道高等学校歴史研究会の高校社会科教員、北海道大学の教職課程学生に対して同様のセミナーを開催した。2004年3月28日には、中高校社会科教員を対象とした第1回セミナーを「デジタルアーカイブが拓く新しい時代 アジア歴史資料センターの試み」と題して国立公文書館会議室で開催し、関東地区の中高教師21名の参加を得た。ネットで一般公募した参加者からは「センターが教材として有効であるので、次回以降もこのような趣旨のセミナーを継続してほしい」また、「地方の教育委員会等においても実施してほしい」などの要望があった。

その後、国内外の大学や学会、研究会等で積極的に広報活動を行い、アジ歴の利用方法、所蔵資料の紹介を重ねてきた。現在では、東北学院大学、小樽商科大学など一部の大学では歴史講座の一環としてアジ歴が利用される程になってきた。また、学会等で発表される論文でのアジ歴資料の引用も増えてきている。一般学生の利用にはまだ課題があるが、大学院以上の研究者にとってアジ歴のデータベースは研究に不可欠になっているといえよう。



写真1 第一回中高等学校社会科教員を対象としたセミナー

一方、利用対象者として重視した中高生に対しては、生徒に直接働きかけるのではなく、まず社会科教師を対象としたセミナーを開催してきた。2004年6月には茨城県高校教育研究会歴史部教育研究会約70名、8月には再度、北海道で高等学校日本史教育研究大会約60名に、2005年10月には富山県高等学校研究発表大会にて約120名を対象にセミナーを開催した。現場の教師からは一次資料に触れる教育の重要性を認識したとの反響があった。その反面、大学受験を優先する現在の歴史教育の問題点や歴史担当の教員が歴史研究を行う時間的余裕が減ってきたために教師自身が一次資料を利用して教材を作ることの困難さが指摘された。



写真2 茨城県高等教育研究会歴史部研究会

同じく2005年6月には歴史教科書の大手出版社から要請を受け、中学高校の歴史教師を対象とした『歴史と地理』のNo.585『日本史の研究』209号に「国立公文書館のデジタルアーカイブ：アジア歴史資料センターと国立公文書館デジタルアーカイブ」を寄稿した。中高教員からの反応を期待したが特に反響はなかった。2006年はシステム更新作業により対外広報活動が限られたため、更新作業が終了した2007年1月にホームページ上で大学や高校の歴史教育関係者を対象としたアジア歴利用に関するセミナーを公募した。やはり、反響は一部の大学からのみで中高校関係者からの募集はなかった。

中高レベルでの一次資料を利用した教育について教育現場で必要性が認識されているのは、これまでの講習会等の経験から明らかである。しかし、実際の授業への応用は、昨年以來高校での歴史教育に関する未履修問題でも明らかになったように難しいといえる。そのことが公募しても募集がない最大の理由だと推測される。ただ、一部先生達の間ではアジア歴の一次資料を使った実験的授業の試みがなされている。

3. 一次資料による歴史教育の可能性

3.1 IT教材としての実験

- 教育情報ナショナルセンター（NICER）¹ 高等学校の地歴公民で実験 -

文部科学省の外郭団体である教育情報ナショナルセンター（NICER）ではアジア歴を高等学校の地理歴史・公民の教材事例としてホームページで紹介している。「民族運動の高揚」というテーマでアジア歴が提供する資料の授業への応用方法を詳細に説明



画像1 アジ歴の資料を利用したIT教材の紹介ホームページ

¹ http://www.nicer.go.jp/eltt/society/high/so_h04_02.html

している。

3.2 北海道での高校教育の実験：遠隔地教育への応用

北海道は、これまで北海道大学、北海学園大学、小樽商科大学等の大学だけでなく、2度、高校の歴史担当教員を対象としたセミナーの要請を受けるほどアジ歴の利用について熱心である。これは、筑波大学から北海学園大学へ移られた前国立公文書館理事大濱徹也教授のご尽力と北海道当別高等学校の吉峰茂樹教諭を中心とした高校社会科学教諭の積極的な働きかけがあったからである。

吉峰教諭は、アジア歴史資料センター開設5周年を記念して発行された『アーカイブズ』（2007年3月発行27号）にアジ歴を高校の歴史教育教材として応用してきた利用者の声として「アジア歴史資料センターと高校歴史教育 - 教育現場からの提言 - 」という報告を寄せた。同教諭は、北海道内の高校、さらに北海道大学での教員課程での講義の経験踏まえて次のように教育現場での一次資料の利用の問題点を指摘している。

同教諭は、昨年後半から歴史教育のあり方に問題を投げかけた履修漏れ問題に言及し進学校時代の経験から高校歴史教育、特にアジ歴が関わる近現代史が軽視される理由を「受験に関わって主要教材を中心に効率よい指導をしなければならない進学校の教員にとって、歴史、特に近現代史に関わる事項は、覚える量が莫大であり、しかも入試で何が出るか分からず誠に効率が悪い。加えて、受験で必要ない生徒に対しては、限られた授業時数で受験に関係ない教科までやる時間とヒマは無い」と説いている。その一方、「歴史を学ぶということは、受験に関わりなく、生徒の思考訓練の教科としてきわめて優れている」として、アジ歴のインターネット特別展を利用した授業の経験から「本来歴史は、自ら自由に史料を見て考えることができるものであることが分かってくると、そのことによって生徒達にも歴史を考えるおもしろさを取り戻すことができるのではないか」と前向きな意見である。さらに「地方にいながら歴史教科書に掲載されている史料が手元で自由に使えること」の意義を説いた。

3.3 大学一般教養としての歴史教育：小樽商科大学の実験

北海道では、大学レベルでも積極的にアジ歴を利用している事例がある。小樽商科大学の荻野富士夫教授は数年前から一般教育選択科目の歴史授業に積極的にアジ歴を取り入れている。昨年は初めての試みとしてアジ歴を利用した論述問題を試験課題として300名ほどの学生に課した。一般教育課程にもかかわらず50名以上の学生が積極的にアジ歴を利用し、歴史に関心を持って答案を提出したとのことである。ある女子大生は答案にアジ歴の意義としてアジ歴が提供する資料には「当時、日本がどのよう

な意図で戦争を行い、どのような人々が関わり合い、どんな思いでその資料を書き記したのか、その事実が映し出されていると思う。私たちは、その資料を今や身近になったインターネットを通して簡単に見ることができる。日本の歴史がもたらし、その日本と係わった内外すべての国や人々にとって、忘れてはならない歴史、過去の産物を、実際の資料を通してより鮮明に、現実実感できることに大きな意義が有るのではないだろうか」と結んでいる。今年10月には荻野教授に招かれ本年度の授業の一環としてアジ歴のデモンストレーションを行った。



写真3 2007年10月の小樽商科大学荻野教授の歴史授業でのアジ歴デモ風景

4. 課題と可能性

本年、高校の歴史教育の在り方に疑問を投げかけたのは多くの高校で歴史授業の未履修である。北海道の吉峰氏の報告からも明らかなように現在の知識量のみを問う大学受験を前提とした現在の高校歴史教育が続く限り、たとえ歴史を必須科目としても一次資料を活用した自ら考える歴史の授業は困難である。しかし、可能性がないわけではない。

写真4は、松戸市の中学2年生が総合学習の一環としてセンターを訪れた後に礼状とともに送られた手作りの壁新聞である。アジ歴での経験を元に作られた壁新聞の編集後記に「私達は日露戦争のことについて調べ、アジア歴史資料センターに行ってきた。私達にはすごく難しい物を選んでしまいましたが、いろいろとわかって自分のためになりました。」と書かれてあった。アジ歴を訪れた時の生徒達は確かに戸惑った様子であった。しかし、特別展を使った説明を行い、データベースの使い方を指導した後、2時間ほど自由に閲覧室のPCを使って資料を利用した後の生徒達の表情か

ら、歴史の面白さや一次資料の持つ迫力を間違いなく感じ取っていたことが読み取れた。アジ歴が中高生や大学生に利用されるためには、学生や生徒が興味を持ち利用出来る特別展のようなコンテンツの充実こそ鍵である。



写真4 中学生から礼状とともに送られた壁新聞